宇宙鉄人シーマイン

晶輪寺零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宇宙鉄人シーマイン

【Ｎコード】
Ｎ９９３５Ｏ

【作者名】
晶輪寺零

【あらすじ】
バ、バ、ババババ、ババ星の（アポー）地球強奪ロボット軍。ＭＥＩＫＯは姉貴、デカイゼル。ミクは妹、ペタンゼル。ボーカロイドの胸と胸、バチっと火花の姉妹愛。ゴーゴージェット、ゴーゴーカー！宇宙（やー！）鉄人（おー！）シーマイン！

バンザイ！！姉妹ロボット　【1】（前書き）

良い子のみんな、元気かな？
みんなでシーマインを応援しようね！

バンザイ！！姉妹ロボット　【1】

「はーあ――」

自宅のベランダから夜空を見上げながら、葉山鏡音リンは溜め息をついた。

「お姉ちゃんたちがいなくなって、もう一年かあ」

若きロボット工学の俊英葉山ＫＡＩＴＯ博士が、姉の葉山ＭＥＩＫＯ，妹の葉山初音ミクと共に行方不明となったのが去ること一年前。残された末娘の葉山鏡音リンは兄姉たちの身を案じてずっと元気が無い。

「どこに行ったんだろ、三人とも」

星空を見上げながら、リンはまたしても溜め息をついた。

その時である。

「あ、流れ星――」

満天の星空を一筋の流れ星がきらめいた。

「お姉ちゃんたちが帰ってきますように、お姉ちゃんたちが帰ってきますように、お姉ちゃんたちが帰ってきますように――」

星に願いを――少女は行方不明の姉たちを思い、流れ星に願い事を祈った。

流れ星はまだ消えずに夜空を滑っていた。

「随分根性のある流れ星ね」

リンは呟いた。

「もうひとつくらいお願いできるかな。ロードローラーが手に入りますように、ロードローラーが――」

欲張ってもうひとつ願い事を唱えようとするリンの目の前に、流れ星が近づいてくる。

「え、ちょ、ちょっと！」

錯覚かと思ったが、流れ星は間違いなくこちらに向かって接近してくる。

「うっそー、なによー、これー？！」

リンは後ずさった。

「なんで、流れ星がこっちに飛んでくるのよ？大気圏突入で燃え尽きるはずでしょ、普通」

通常、ほとんどは大気との摩擦で燃え尽きるが、大きさや材質によっては燃え尽きることも無く、地上に落下することも稀に在る。

「だからって、なんでこっちに向かってくるの？」

さあ、何ででしょう？

階段を駆け下りて、玄関から庭に出たリン。

「わ、わー！！！！！！」

流星はグングン接近し、物凄い光の玉となって目の前まで迫ってきていた。

バンザイ！！姉妹ロボット　【1】（後書き）

肩の力を抜いて下さいｗ

バンザイ!!姉妹ロボット　【2】

突如飛来した謎の流星が葉山家の庭先に迫ってくる。

「な、な、な、な――」

正体不明の発光体は庭の上空に浮遊し、少しずつ高度を下げてくる。

「ねえ、リン。一体どうしたの、そんなにあわてて……」

同居人で、母親代わりの白河弱音ハクが騒々しいリンを心配して庭に顔を見せた。

「ハクお姉ちゃん!」

「な……」

突如庭先を騒がす謎の発光体を目にしたハクが、声を失った。

「リン、これは一体――」

「リンにも分かんないよ!」

やがて、発光体は全体を包んでいたまばゆいばかりの光を消し、その全貌を現した。

「うそ――」

「なに、これ?」

リンとハクは声を失った。

それは恐らく金属と思しき材質で作られた円形状の物体、平たく言えば空飛ぶ円盤だった。

「う、宇宙人?」

ハクがつぶやいた。続いてリンも口を開く。

「な、謎の円盤UFO(ユーエフオー)だったの?」

ちょっと、リンちゃん。
「何さ！」
君、一体いつの生まれだ？
「うっさいわねー！」
そう怒鳴りなさんな。
「リンにとってはねー、Ｘファイルだって懐かしテレビ番組なんだからね！どっちでもおんなじなの！」
はいはい。

「あ、ああ――」
「ハクお姉ちゃん？」
ハクはあまりの事態に気を失ってしまった。
「お姉ちゃん、しっかりして！」

そのとき――円盤の下部が開いた。

「なに？！」
目を見開いて凝視するリンの目の前に、円盤の中から何かが姿をあらわし、地上に下りてきた。
両手両足が二本ずつ、頭が一つの、見たところ人間と同じようなシルエットの、金属質の物体が二つ。宇宙服を身にまとったエイリアンであろうか、それともロボットか何かだろうか？

「な、な、な、なに？」
リンはハクを抱きとめながら降りてきた謎の人物（？）を睨み付けた。
「なに、スペースインベーダー？」
よくよく好きねえ、あんたも。

「ちょっと、あんたたち！」
威勢よく、しかし、足元が震えながらもリンはけなげに宇宙人と思しき二人組みに真っ向から対した。
「ち、地球に一体何の用なの？地球侵略？それともヒューマンミューティレーションか何かが目的？」
言葉が通じるかどうかなど一切考えず、リンは噛み付くように言った。
「リ、リンがいる限り、ハクお姉ちゃんには指一本触れさせないんだからね！」

降りてきた二人は、一人が赤、もう一人は青いカラーリングを基調とした、ロボットのような金属質な外見だった。
「ちょっと、聞いてるの？」
リンはもう我を忘れていた。その時である。

「リン――」
赤いエイリアンが語りかけた。

「へ――？」
リンもが点が行かない。
「何で宇宙人がリンの名前を知ってるのよ」

「違うよ」
青いエイリアンも同じように声をかけた。
「宇宙人じゃないよ」

リンは呆気に取られている。無理もあるまい、出し抜けに出没した謎の円盤ＵＦＯから出現した宇宙人か何か、正体の分からない相手が達者な日本語で気安く自分の名前を呼びかけてきたのだから、葉

山鏡音リンならずとも理解不能の事態なのは致し方ない事と言える。

「ちょっと！」

リンは半ばやけくそで叫んだ。

「あんたたち、一体誰よ！」

一歩の引かぬと言う勇ましい気配のリンを前に、二人のエイリアンの顔が左右に展開した。何やら、宇宙服か何かの前面が開いて中の顔を見せるつもりらしい。

「！」

そこに覗いた顔を目にして、リンは声を失った。

バンザイ！！姉妹ロボット　【2】（後書き）

ミクのイメージカラーは緑なんですが、ここでは原作のキョーダインを基準にして青で通させてもらいます。
悪しからず。

バンザイ!!姉妹ロボット　【3】

「お姉ちゃん?!」
リンは仰天したように、声を張り上げた。

「大姉(おお)ちゃん?」
赤いロボットのディスプレイに映った顔に呼びかけた。
「小姉(ちい)ちゃん?」
今度は青いロボットの顔にリンは声をかけた。

「リンちゃん――」
青いロボットの顔が、笑顔で呼びかけた。
「ミクだよ、帰ってきたんだよ」

「リン、久しぶりね」
赤いロボットの顔も、同じように感慨深く言った。

「ど――」
リンは驚いて二の句が告げない有様であった。
「どういう事、一体」
辛うじてそれだけを口にしたリンであった。

「リン――」
「ミクたちね、帰ってきたんだよ」

「ホントに、お姉ちゃんたちなの?」

「そうよ」
赤いロボットのディスプレイに写った、大姉ちゃんーー葉山ＭＥＩＫＯが答えた。

「びっくりしたでしょ」
青いロボットの小姉ちゃん――葉山初音ミクも優しくリンに言った。

その時である。

「う～ん――」
気絶していたハクが目を覚ましたようである。
「ハクお姉ちゃん」
リンが心配そうに声をかけた。

ミクが目を覚ましたハクに言った。
「ただいま、ハクお姉ちゃん」
ＭＥＩＫＯも懐かしげに言った。
「ハク、長い間留守にして、御免ね」

「なんだ――」
ミクとＭＥＩＫＯの顔を写したロボットが二体、こちらに話しかけてきたのを見たハクは、寝ぼけ眼で呟いた。
「わたしったら、まだ夢を見てるのね――」

「ハクお姉ちゃん！」
そのまま再び気を失うハクに、リンが慌てて声をかけた。

「ボーカロイド?」

円盤の中に通されたリンとハクは、顔のディスプレイにＭＥＩＫＯとミクの顔を映し出した二体のロボットに問い返した。

「ミクたちね、ボーカロイドになって帰ってきたの」

「どういう事なの、一体?」

ハクにはまったく状況が把握できない。リンも同様であった。

「それはね――」

ＭＥＩＫＯの顔を映し出した赤いボーカロイドが説明を始めた。

「私たち三人がババ星に連れ去られたのが今から一年前――」

「ちょっと――」

リンが話の腰を折るように言った。

「お姉ちゃんたち、宇宙に行ってたの?」

「そうなの」

ミクの顔を映した青いボーカロイドが頷いた。

「ババ星は移住可能な星を探して宇宙の各惑星を物色していたらしいんだけど、彼らはどうやら地球に狙いをつけたらしいの」

「それって、地球侵略?」

「ええ――」

リンの質問にＭＥＩＫＯとミクのボーカロイドが同時に頷いた。

「ＫＡＩＴＯは地球でも有数のロボット研究者だったから、ババ星

の侵略部隊が目をつけたの」

「それじゃ、ミクと姉さんは」

ハクが問い返した。

「まあ、巻き添えって事かな？」

ＭＥＩＫＯの赤いボーカロイドが両手を広げるように答えた。

「だけど、よく二人とも逃げて来られたわねえ」

ハクの言葉に、二人のボーカロイドは顔を見合わせた。

「残念だけど」

「ちょっと違うのよね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9935o/

宇宙鉄人シーマイン

2011年1月4日04時08分発行